



▲2011（平成23）年4月29日、30日に志津川中学校で行われた第1回南三陸復興市では津波で流失した店の名前がテントに取り付けられた。予想をはるかに超えた多くの住民が避難先から集まった。

被災してから約50日後の2011（平成23）年4月29日、30日の2日間にわたり、志津川中学校を会場に、第1回南三陸復興市が開催された。

南三陸町の店主のほとんどが店や自宅、家族や親戚、大切な仲間を失う中、復興市実行委員長の山内正文さんは、「心まで被災者になるな。おれたちがみんなを元気にしなきゃ。なるべく早く復興市をやろう。」といち早く動き出した。震災前に南三陸町の商店街は、全国の商店街と「ぼうさい朝市ネットワーク」を結んでいた。このネットワークに加盟している商店街の人々が、はるか遠方から市の開催に力を貸してくれたのである。とにかくみんなが集まる場を作ろう。その一心で店主たちは動き出した。

第1回の南三陸復興市には、1万5千人の人たちが集り、その多くは住民たちだった。避難して離れ離れになっていた住民たちが、被災後初めて再会し、生きていることを確かめ合った。会場のあちこちで人々は抱き合い、涙を流していた。

ここで「もう一度あなたの店のものを食べたい」という声を聞いた店主たちは、店は地域の人たち同士がふれあえる場でもあるということを再認識した。一時はあきらめかけた人たちが、店や会社を再建しようという勇気を取り戻した。

多くのボランティアや復興を支えようと訪れてくれたみなさんに、復興市の開催は支えられた。